

パイロット種苗放流による漁場性の解明（クロアワビ）*

金丸 誠司・加来 靖弘・芳養 晴雄

目 的

熊野灘沿岸域のアワビ漁場にクロアワビ成貝に標識を取り付けたパイロット種苗を放流し、追跡調査を行なうことにより、アワビ漁場の諸性質とクロアワビの生態を明らかにする他、生物・環境・経済等の諸分野からも漁場として成り立つ諸条件を漁場性として解明しようとするものである。

なお、パイロット種苗とは種苗放流実験と区別するために用いた用語で、漁場の諸性質とクロアワビの生態との関係を短時間で解明するための大型のアワビ実験群である。

方 法

熊野灘沿岸域の三輪崎・太地地先のアワビ漁場にパイロット種苗を放流し、放流点を中心として設定した 100 m^2 の調査区域内において追跡調査を実施した。パイロット種苗の放流個数は三輪崎地先が 202 個、太地地先が 180 個である。

なお、この放流追跡調査は昭和 56，57 年度も同様な方法で実施した。

結 果

熊野灘の沿岸域において昭和 56・57・58 年度の 3 ケ年の間に、3 地先、7 ケ所で実施したパイロット種苗の放流追跡調査の結果の概要は次のようなものである。

詳細については、昭和 56～58 年度指定調査研究総合助成事業報告書（パイロット種苗放流による漁場性の解明）に報告されている。

1. パイロット種苗は放流直後は生息密度や分布状態が不安定であるが、3～6 ヶ月後には安定した数値をとるようになる。

2. パイロット種苗の生息密度と分布状態は海底地形による影響が大きい。すなわち、転石帯や異形ブロックを配置している場所のように、海底地形が複雑な所では、生息密度が高く、集中分布の程度が低いのに対し、岩礁域などのように比較的単純な場所では、生息密度は低く、集中分布の程度は高くなる。

3. 投石礁と異形ブロックを配置した場所のアワビの収容量の比較では、両者とも $1\text{ 個}/\text{m}^2$ 程度の生息量は見込めるが、異形ブロックに比べ投石礁ではアワビの発見や採集は難しい。このため、投石礁で漁獲を行なう場合は、異形ブロックなどで漁場改良を行なった場合に比べ漁獲率はかなり低くなる。

漁場改良や漁場造成を実施する場合、漁獲を目的とするときは異形ブロックを用い、乱獲を防ぐための保護礁として利用するときは投石を利用することが望ましいと思われる。

* 指定調査研究事業費による。